

# 平成21年度入学生における普通教科「情報」の履修に関する アンケート調査

篠 政 行

## Investigation of the New Students in 2009 Academic Year about the Subject “Information Study”

Masayuki SHINO

2003年度に普通教科「情報」が高等学校で必修科目として導入され、これを履修した学生が2006年度より大学に入学して4年目となる。そこで、大学新入生に対して普通教科「情報」の履修状況を調査する目的で、「情報」関連の科目が必修化される以前の2005年度から新入生に対してアンケート調査を行ってきた。特に普通教科「情報」を履修した学生が最初に大学へ入学した2006年度から2009年度までの4年分はより詳細に調査した。その結果、年度毎の履修状況には大きな変化がないことがわかった。

キーワード：情報教育、普通教科「情報」、情報リテラシ、コンピュータリテラシ

### 1. はじめに

1990年代半ば頃より、パソコン（以下、PC）の性能の向上、インターネットの商用利用の拡大など、個人でITを利用しようという動きが活発になってきた。以前は特定の研究者に利用が限られていたインターネットが一般の個人レベルで接続できるようになったことで、個人にもITインフラが急速に普及した。

このような状況の中、情報化社会の進展に対応するために、1999年3月に高等学校学習指導要領が改訂され、2003年4月に試行された高等学校学習指導要領（文部科学省2003）により高等学校で教科「情報」新設され必修科目となった。つまり、普通教育においては普通教科「情報A」、「情報B」、「情報C」から1科目以上の履修、専門教育においては専門教科「情報」の履修がそれぞれ必修化された。2006年度からは、この新課程を修めた生徒が大学に入学してきたため情報リテラシ教育の教育内容を検証するための資料として、新入学生の基礎的な情報対応能力、いわゆる情報リテラシの能力をいかに有するかを調査した報告が多くなされてきた。主なものに

2006年度から毎年東京大学で実施されている「高等学校普通教科「情報」の履修等状況調査」や2009年に経済産業省から「高等学校における教科「情報」について」と題して、教科「情報」の実態調査が報告された。

普通科高等学校において、内容の大きく異なる「情報A」、「情報B」、「情報C」という3科目から選択して学習が行なわれてきているため、学生の情報に関する学習内容は多様となっていると考えられる。そこで大学側でも、新入生の入学前の情報関連科目の履修状況について把握しておくことが求められる。また、これらの科目の履修を通じて、学生がどの程度の情報リテラシを身につけ、どのようなことをさらに大学で学びたいと考えているかを把握しておくことも必要と考えられる。

そこで筆者は、高等学校の新指導要領による教育を受けた新入生に対し、情報系科目についての履修状況や情報リテラシの修得状況などについて2005年度よりアンケート調査を続けている。本研究では、2009年度分のアンケート集計結果について報告するとともに、その結果を2005年度分から2008年度分まで

と比較する。また、上記の経済産業省のデータとも比較検討してみた。なお、昨年度から始めた文化女子大学の新生生に対しても同様なアンケート調査を行ったので併せて報告する。

## 2. コンピュータの普及

1990年代後半以降、個人へのPCの普及が急ピッチに進んだ。図1に示した総務省の「通信利用動向調査（世帯編）—平成20年度報告書—」によると、2000年にはPCの世帯保有率が50.5%だったものが、03年には78.2%となり、その後は90%に近づく高止まりの数値で推移している。このように個人の世帯へPCの普及が加速的に進んだ背景には、Windowsの登場によりGUIの劇的な変化がもたらされ、その利便性が受け入れられたことと、更にはインターネットという新しい利用形態が生まれたことも大きな要因である。その利用者数や人口普及率の伸びは、2000年の4,708万人（37.1%）から08年の9,091万人（75.3%）となっており、10年も経たずに共に約2倍の値である。その推移を図2に示す。

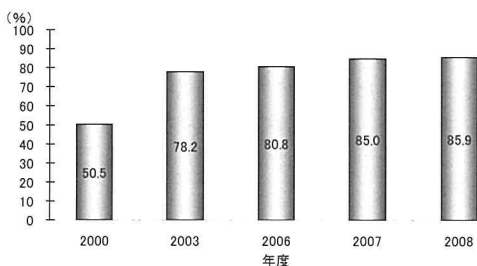


図1 パソコン保有率の推移

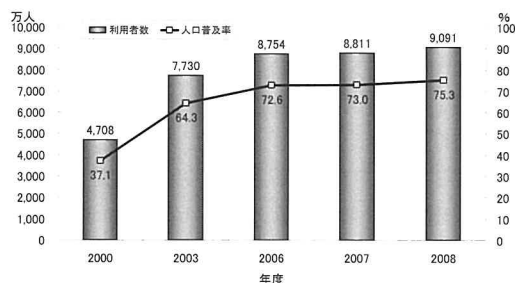


図2 インターネット利用者数及び人口普及率の推移

また、個人向けPCの伸び率は鈍化しているため今後は緩やかな伸び率で推移するであろうが、一方

でその他の情報通信機器の保有にも目を向ける必要がある。図3にPCも含めた主な情報通信機器の保有状況の推移を示した。

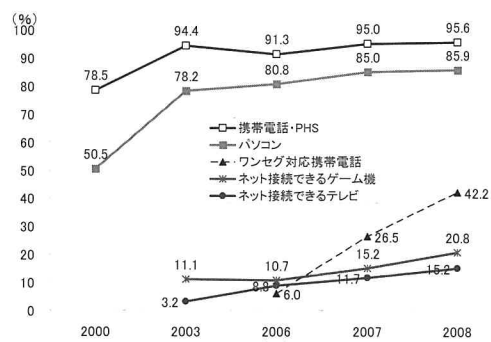


図3 情報通信機器の保有率の推移

<図1～3の出典> 総務省「通信利用動向調査（世帯編）—平成20年度報告書—」

PCはもちろん、その他の情報機器は全てインターネットを利用した機器であり、いかに現代社会が情報に依存しているかを如実に語っているといえる。

## 3. 調査方法

調査は2005年度から2009年度に入学した1年生にのみ記名式で行った。2005年度入学生は高等学校での教科「情報」を受けていない学生であり、2006年度から2009年度入学生はこれを受けてきた学生である。なお、年度ごとの質問内容や対象の学科は少しずつ変えているためにすべての項目で比較することはできなかった。また、調査には普通教科「情報」を履修してきた学生を対称にしているのも、原則的に高等学校普通科の課程を修了したことを前提に行った。なお、2009年度は主に5月（一部9月に実施）に調査を行った。概要は次のようである。

### 3.1. 調査対象

2005年度入学生

短期大学 食物栄養科 86名

2006年度入学生

大学 映像コミュニケーション学科 63名

短期大学 保育科 124名

短期大学 食物栄養科 84名（総計 271名）

2007年度入学生

大学 映像コミュニケーション学科 50名

大学 空間造形学科 44名

短期大学 保育科 119名  
 短期大学 食物栄養科 77名 (総計 290名)

#### 2008年度入学生

大学 映像コミュニケーション学科 51名  
 大学 空間造形学科 42名  
 短期大学 保育科 126名  
 短期大学 食物栄養科 62名 (計 281名)  
 文化女子大学 生活造形学科 58名  
 文化女子大学 住環境学科 20名  
 文化女子大学 服装学部 (服装造形学科、服装社会学科) 229名

(計 307名)  
 (総計 588名)

#### 2009年度入学生

大学 日本文化学科 51名  
 大学 国際文化学科 43名  
 大学 人間関係学科 72名  
 大学 空間造形学科 36名  
 大学 映像コミュニケーション学科 46名  
 大学 健康栄養学科 52名  
 短期大学 保育科 99名 (計 399名)  
 文化女子大学 生活造形学科 72名  
 文化女子大学 住環境学科 24名  
 文化女子大学 服装学部 (服装造形学科、服装社会学科) 230名

(計 326名)  
 (総計 725名)

以上のデータを有効なものとして結果を整理した。

### 3.2. 調査方法

質問紙 (記名式) による選択式

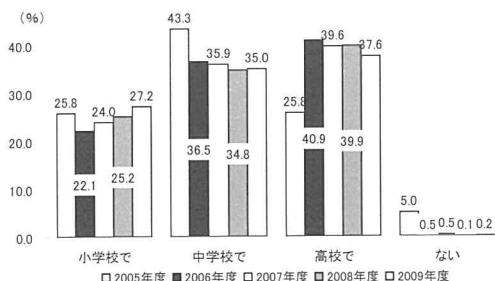


図4 「パソコンに触れる授業をいつ受けたことがありますか (複数回答可)」

## 4. 調査結果

### 4.1. パソコンの経験

大学入学以前のPCにかかわる経験について、2005年度生から2009年度生までの回答を図4に示す。

2005年度の「受けたことがない」が5.0%もあったものが、新カリキュラムで履修を開始した2006年度以降この項目は急激に減少し、ほぼ0%台で推移している。また、高等学校での「受けたことがある」の数値が2005年度に比べ約15%も増加していることは高等学校での情報教育の浸透の成果といえる。ただ、この教科が必修化され7年目を迎えるにもかかわらず「受けたことがない」という回答が0%とならないのは、2006年秋に報道された「未履修問題」が未だに存在していることを示しているのであろう。いずれにしても履修漏れが疑われる集合があるのは残念である。

### 4.2. 普通教科「情報」の履修状況

2006年度から2009年度までの入学生が高等学校で履修した情報科目は図5のとおりである。

履修した各科目の割合では、「情報A」が多く「情報B」、「情報C」が少ないという傾向は当初から変化はない。また、「不明/忘れた」と回答した割合は、依然として3割程度の多さである。これが直ちに履修漏れを意味するものではなく、例えば時間割上は情報の授業であっても他の科目に振り替えられていたか、そもそも情報の授業が時間割上も存在しなかったか、あるいは情報の授業がきちんと行われていたにもかかわらず、印象に残らない授業だったために科目名を忘れて回答できなかったかのどれかと考えられる。

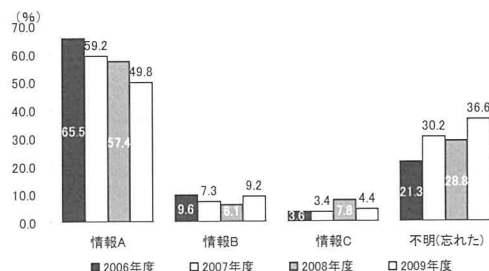


図5 「情報の科目は何を受けましたか (複数科目あり)」

ここで検討すべきは、情報の授業がきちんと高等学校で行われていたにもかかわらず「不明／忘れた」という学生の回答は、情報科目に対して印象や関心が薄いのではないか。ともかく、この項目に該当する学生は学習に対する意欲が乏しい可能性は否定できない。そこで、図6に経済産業省のデータを示しこれと比較してみることにする。

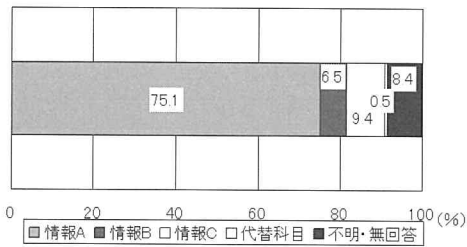


図6 教科「情報」の科目の選択状況

<出典> 経済産業省「高等学校における教科「情報」について」

ただし、このデータは高等学校1年次での教科「情報」の科目の選択状況を示したものである。これによると、全国的には高等学校の教科「情報」では、多くの学校で「情報A」（「情報活用の実践力」に重点が置かれている科目）が履修されており、約3/4が「情報A」を選択していることが分かる。つまり、今年の著者の調査結果は「情報A」が多いことは分かるが、全国的に見ると約25%も少なく、その分「不明（忘れた）」にシフト（8.4%から36.6%へ）していることになる。

また、経済産業省の調査では、「情報B」（「情報の科学的な理解」に重点が置かれている科目）及び「情報C」（「情報社会に参画する態度」に重点が置かれた科目）を選択している学校は多くないが、ど

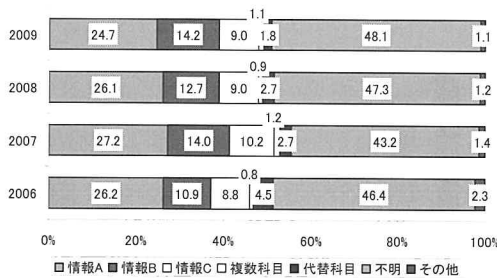


図7 「教科「情報」の科目として、どの科目を履修しましたか」  
<出典> 東京大学情報基盤センター「高等学校普通教科「情報」の履修等状況調査」

ちらかという「情報C」の方が多く選択されている結果となっているが、本調査では「情報B」（9.2%）と「情報C」（4.4%）と全く逆転している。

さらに、2006年度から毎年東京大学で実施されている「高等学校普通教科「情報」の履修等状況調査」とも比較してみた。図7に東京大学のデータを示した。

これを見ると全国的な調査結果とはかなりかけ離れていて、履修した割合は、「情報A」が一番多く、その約半分が「情報B」、「情報A」の約1/3が「情報C」となっている。ここでの特徴は、「不明」と回答した割合が約半数近くもあり、どの科目よりも多くの回答がされていることに驚かされる。

さて、「不明（忘れた）」にシフトした分の原因は、高等学校で履修した学年がたまたま1年生に偏っていて、その内容や教科書について「忘れた」や「覚えていない」結果とも受取れるので、次に各教科を何年生で履修したのかを調査した（図8）。

履修時期は1年生に偏っているが、これまでの年度に比べると1年生で履修した学生が徐々に増加し、2年生、3年生に履修した学生が減少している。この結果からは、1年生での履修は40～50%であり、2年生、3年生では2～3割で履修していたことになる。先ほどの理由が1年生に履修したのならまだしも、2年生、3年生での履修者がいて、なおかつ「不明／忘れた」という結果からは、履修漏れが疑われる可能性以外に、やはり印象度や関心度の薄さ、学習意欲の低下からという結論が導き出される。

ここでも、経済産業省の調査との比較をしてみる（図9）

高等学校等では、3年間で1科目2単位以上の履修が必要であるが、多くの高等学校では、1年次で履修が行われていることが分かる。今度の比較でも

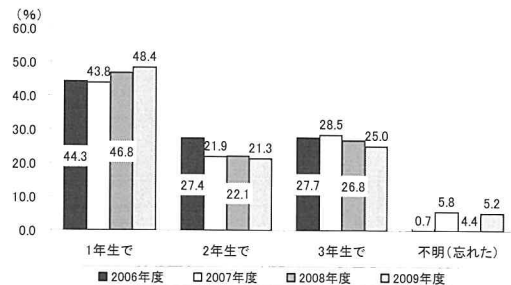


図8 「情報教育（情報A,B,Cなど）を高校の何年生で受けましたか」

分かるように、全国平均とは大きな開き（81.5%と48.4%との差約33%も）がある。

更には、東京大学のデータと比較してみる（図10）。

ここでの値は、本調査の値に近い。ただし、3年生での履修数が5倍（2.5%と10.5%）ほどになっている点が大きな差が生じている。

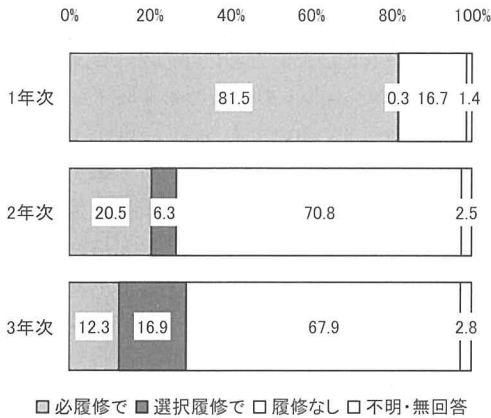


図9 各年次での教科「情報」の履修状況

<出典> 経済産業省「高等学校における教科「情報」について」

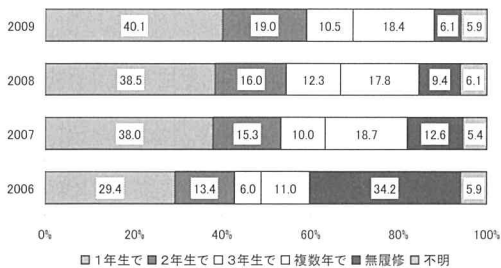


図10 「高校何年生の時に教科「情報」を履修しましたか」  
<出典> 東京大学情報基盤センター「高等学校普通教科「情報」の履修等状況調査」

#### 4.3. 個人的情報環境と苦手意識

上記のように情報科目に対して印象度や関心度の薄さということはどこから由来するのか、PCに対する経験値からくるものかについて調査を行った。

大学入学以前の、PCの所有に関する状況（表1、図11）、PCの利用スキル状況（表2、図12）、不得手の原因（表3、図13）についての調査結果を示す。

(%)	ある	専用ではないが自由に使えるものがある	ない	合計
2006年度	30.2	53.5	16.3	100
2007年度	22.9	57.6	19.4	100
2008年度	33.0	54.1	12.9	100
2009年度	37.9	50.0	12.1	100

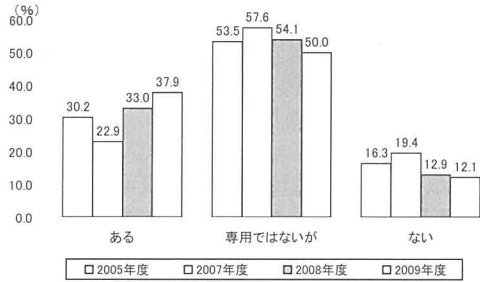


図11 「自分専用のパソコンがありますか。」

「ある」と「専用ではないが」を含めると約90%に近い大学生がPCが利用可能な状況にあると考えられる。ただPCの利用環境の無い学生がインターネットに接続していないかとうとそうでもなく、携帯電話を通してインターネットを学生の多くは利用している。ところが、学生の中には携帯電話上のメールのやりとりとPCでのインターネットとが別物であると思っている。これは、「図3 情報通信機器の保有率の推移」にあるように、ワンセグ対応携帯電話も、ネット接続できるゲーム機も、ネット接続できるテレビも確実にその利用率は上がっているにもかかわらずである。

(%)	得意だった	どちらともいえない	苦手だった	合計
2005年度	8.1	50.0	41.9	100
2007年度	9.5	50.9	39.6	100
2008年度	15.5	50.3	34.2	100
2009年度	13.6	52.8	33.6	100

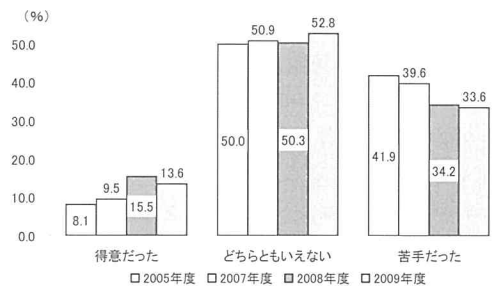


図12 「パソコンは得意でしたか。」

「得意だった」が増加し、「苦手だった」が減少していることは、情報教育の成果であろう。また「どちらともいえない」が依然として過半数であることは、自分の評価に不安感を持つ現代学生の気質が現れているのであろう。ただ、小学校、中学校、高等学校と何らかの形で、情報教育を受けてきていることを考えるに今年も「苦手だった」が30%強の値を取っているのは、教育受けてきたのどこかの段階で問題があるはずであり、学生はどのような点で苦手意識を持つのかを調査した。

表3 パソコンは苦手だった人に聞きます。その原因は、何だと思えますか。(複数回答可)

(%)	1	2	3	4	5	6	7	8	合計
2005年度	23.7	15.6	14.1	11.1	7.4	14.8	11.9	1.5	100
2007年度	19.7	18.8	14.2	13.1	7.7	13.1	13.1	0.4	100
2008年度	22.4	17.3	12.7	4.7	8.8	17.7	16.1	0.4	100
2009年度	20.7	18.7	12.8	6.1	8.0	17.3	15.2	1.1	100

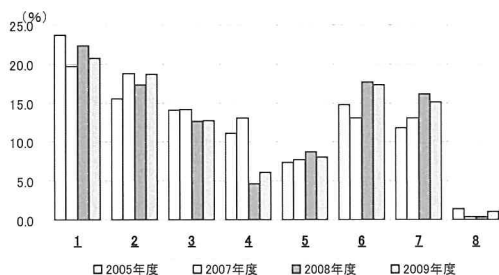


図13 「パソコンは苦手だった人に聞きます。その原因は、何だと思えますか。(複数回答可)」

ただし、上記1～8の項目は、以下の通りである。理由として、1は「操作が覚えきらない」、2は「タイプが速く打てない」、3は「パソコンに触れる機会が少ない」、4は「機械が壊れそうで怖い」、5は「操作の次のイメージがつかない」、6は「用語の意味がわからない」、7は「機械が苦手」、8は「その他」となっている。

全体的な結果の傾向は例年と同様である。コンピュータスキルについての原因が大勢である。上位にきている1「操作が覚えきらない」、2「タイプが速く打てない」、5は「操作の次のイメージがつかない」については、3「パソコンに触れる機会が少ない」という理由からで、やはりコンピュータリテラシの問題であろう。基本をきっちりやっけてからでないと、ただ闇雲にやっけては自己流の癖が付

いてしまい効率が悪く肝心のことがわからなくなる危険性もはらんでいる。そのため余計にPCに対して不安が募り、7「機械が苦手」の理由が出てくるのであろう。ただ、上述の「PCの所有に関する状況(表1)」から見れば、自由に使える状態にPCはあるので、もっとスキルは上がって当然だと思うが、そのようにはなっていない。細かく見ると、PCを自由に使える学生の中にも「苦手だった」と答えたものが見受けられたことは、スキルを磨くような使い方はしていないことになる。インターネット等を利用したweb上の情報のやり取りなど個別の項目に執着しているのであろう。

一方で、4「機械が壊れそうで怖い」が確実に減ってきている。これは、常に携帯電話などの携帯端末機を肌身離さず使っている世代にとっては当たり前のことなのであろう。一見すると、この調査結果は相反するようにも見えるが、あくまで上述したように学生の中にはPCと携帯電話とは「別物」という意識が働いての結果であろう。

また、6「用語の意味がわからない」の理由は、英語ばかりでなかなか頭に入らないことは分からないでもない。しかしながら、現実問題としてカタカナ言葉は世の中に溢れていて学生たち自身も多くの場面で使っているはずであるから、情報に関する専門用語にもある程度の知識を得ようと努力を惜しむことのないように、学習意欲をもって取り組んで欲しい。

#### 4. 4. 履修科目に対する理解(情報リテラシの状況)

高等学校で履修した普通教科「情報」の各科目の授業内容について、どのような内容を学習し、どのように理解したのかを調査した。2006年度生から2009年度までのデータを比較のために図14～17と表4にして示した。なお、このアンケート内容は東京大学情報基盤センター 情報メディア教育部が行っているアンケート調査方法を参考にした。

<授業内容>

A タッチタイピング、B ワープロの基本操作、C 表計算ソフトの基本操作、D プレゼンテーションソフトの基本操作、E 電子メールの基本操作、F インターネットによる情報検索、G プログラミング、H コンピュータの仕組み、I ホームページ作成、J 画像処理、CG、マルチメディア、K 情報モラル・著作権・ウィルス、L ネットワーク、M データベース、

N シュミレーション・モデル化

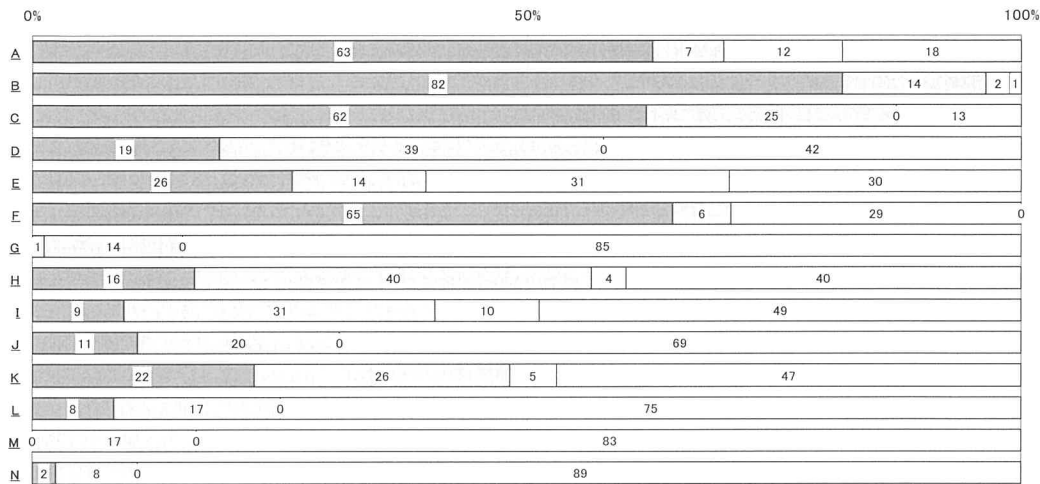
これらの学習内容から、

1. 『「情報」で学んで、その内容を理解している。』
2. 『「情報」で学んだが、その内容は理解していない。』

3. 『「情報」では学んではいないが、その内容は他の教科や独学でマスターした。』

4. 『「情報」では学んではいないし、その内容も理解していない。』
- の段階に分けて各自の理解度を回答させた。

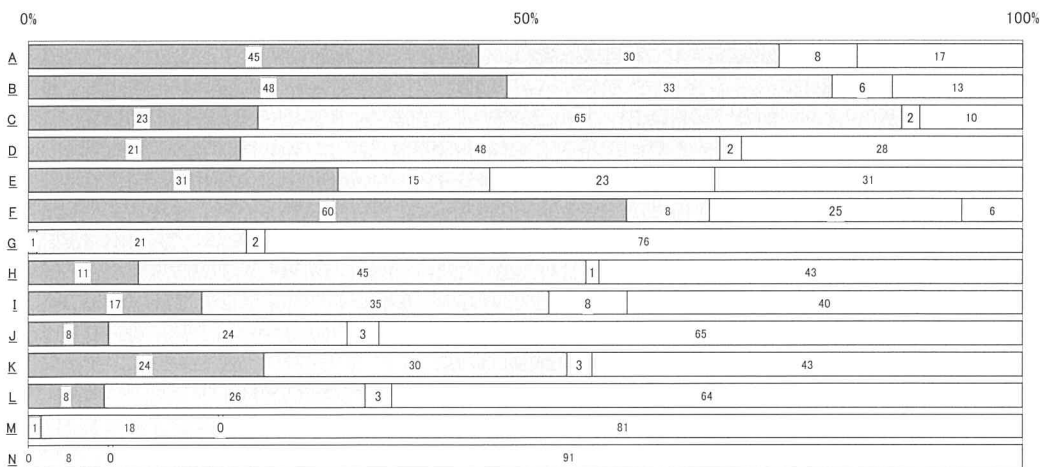
図14 情報科目(情報A,B,C)の学習内容および理解度について(2006年度)



- 1. 「情報」で学んで、その内容を理解している。
- 2. 「情報」で学んだが、その内容は理解していない。
- 3. 「情報」では学んではいないが、その内容は他の教科や独学でマスターした。
- 4. 「情報」では学んではいないし、その内容も理解していない。

図14 2006年度生の結果

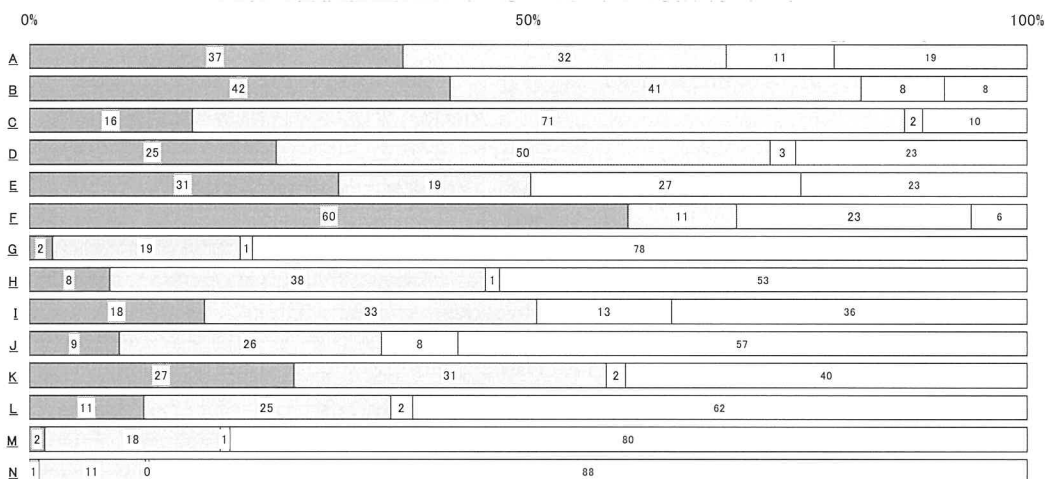
図15 情報科目(情報A,B,C)の学習内容および理解度について(2007年度)



- 1. 「情報」で学んで、その内容を理解している。
- 2. 「情報」で学んだが、その内容は理解していない。
- 3. 「情報」では学んではいないが、その内容は他の教科や独学でマスターした。
- 4. 「情報」では学んではいないし、その内容も理解していない。

図15 2007年度生の結果

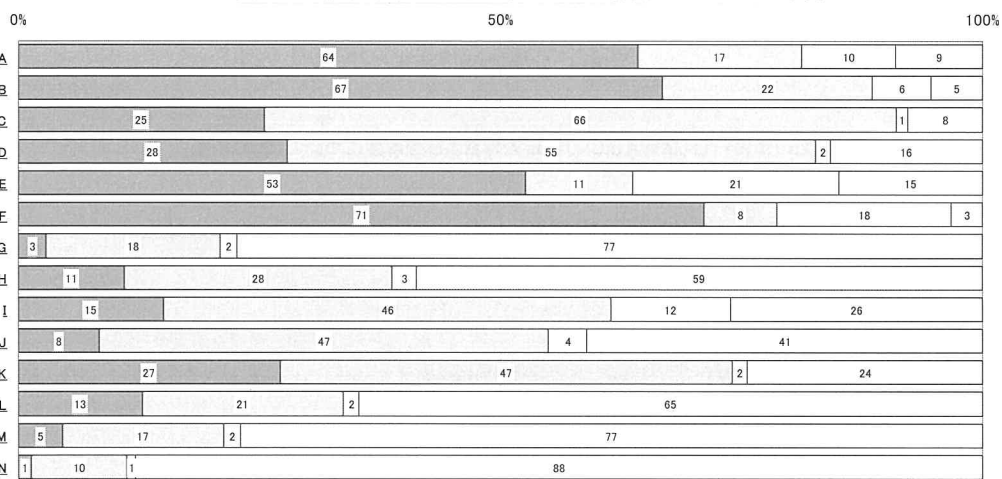
図16 情報科目(情報A,B,C)の学習内容および理解度について(2008年度)



- 1. 「情報」で学んで、その内容を理解している。
- 2. 「情報」で学んだが、その内容は理解していない。
- 3. 「情報」では学んではいないが、その内容は他の教科や独学でマスターした。
- 4. 「情報」では学んではいないし、その内容も理解していない。

図16 2008年度生の結果

図17 情報科目(情報A,B,C)の学習内容および理解度について(2009年度)



- 1. 「情報」で学んで、その内容を理解している。
- 2. 「情報」で学んだが、その内容は理解していない。
- 3. 「情報」では学んではいないが、その内容は他の教科や独学でマスターした。
- 4. 「情報」では学んではいないし、その内容も理解していない。

図17 2009年度生の結果



表4 情報教科(情報A,B,C)を受けた方に、 学習内容や知識について聞きます。								
(%)	項目	A	B	C	D	E	F	G
2006年度	1	63	82	62	19	26	65	1
	2	7	14	25	39	14	6	14
	3	12	2	0	0	31	29	0
	4	18	1	13	42	30	0	85
2007年度	1	45	48	23	21	31	60	1
	2	30	33	65	48	15	8	21
	3	8	6	2	2	23	25	2
	4	17	13	10	28	31	6	76
2008年度	1	37	42	16	25	31	60	2
	2	32	41	71	50	19	11	19
	3	11	8	2	3	27	23	1
	4	19	8	10	23	23	6	78
2009年度	1	64	67	25	28	53	71	3
	2	17	22	66	55	11	8	18
	3	10	6	1	2	21	18	2
	4	9	5	8	16	15	3	77
(%)	項目	H	I	J	K	L	M	N
2006年度	1	16	9	11	22	8	0	2
	2	40	31	20	26	17	17	8
	3	4	10	0	5	0	0	0
	4	40	49	69	47	75	83	89
2007年度	1	11	17	8	24	8	1	0
	2	45	35	24	30	26	18	8
	3	1	8	3	3	3	0	0
	4	43	40	65	43	64	81	91
2008年度	1	8	18	9	27	11	2	1
	2	38	33	26	31	25	18	11
	3	1	13	8	2	2	1	0
	4	53	36	57	40	62	80	88
2009年度	1	11	15	8	27	13	5	1
	2	28	46	47	47	21	17	10
	3	3	12	4	2	2	2	1
	4	59	26	41	24	65	77	88

調査結果から全体的に理解度が減じている傾向である。特に、情報リテラシの基礎項目である A タッチタイピング、B ワープロの基本操作、C 表計算ソフトの基本操作は軒並み芳しくない。それどころか、C 表計算ソフトの基本操作は年を追うごとに理解していないものが増加している。60%以上が理解度を満たしている基準とすると、かろうじて F インターネットによる情報検索のみが、その線の上に上がってくるだけで、他は皆無である。

教科「情報」で習ったものの中では C 表計算ソフトの基本操作が一番多く、最も少ないものは N シュミレーション・モデル化、また情報の授業で身についたものは E 電子メールの基本操作であり、逆に

少ないものは N シュミレーション・モデル化と前述と同じものをあげている。

これらから、興味・関心がないことには行動せず、その逆で、自宅でいくらでも出来る環境を利用してインターネット等での情報検索には熱心に取り組んでいることなどが上記のような結果になってものと思われる。このあたりにも、自分の評価に不安感を持つ現代学生の気質や情報科目に対して印象度や関心度の薄さが現れているのであろうか。さらにいえば、「ゆとり教育」などで高等学校での教育内容の減少に加え、大学入試の科目数の減少や易化により、学習しなくても大学に入学できる学生が増加している。それに伴い、高等学校で学習するはずの内容を理解していない大学生や大学で学ぶ意欲の低い大学生が増加していることも、これらの結果の反映であろう。

また、できると感じた内容として最も多くは、E 電子メールの基本操作であり、逆に少ないものは N シュミレーション・モデル化とこれまた前記と同様な値を示している。学生は携帯電話を主にしてインターネットを利用している。一般に「インターネットの利用」という文脈では WWW ブラウジングを指すことが多いことから、学生の WWW ブラウジングや電子メールが携帯電話に依存していることがわかる。

逆に、学習もしていないうえに理解もしていない内容、つまり全く授業でやらずに独習してその内容を獲得したものは、前記とは全く逆で最大が N シュミレーション・モデル化、最小が E 電子メールの基本操作となっていた。中には N シュミレーション・モデル化のように80%を越えるものもあり、リテラシ向きの科目内容ではないのかもしれない。

#### 4.5. 教科「情報」担当教員の教科

本来ならば教科「情報」を教えるのは「情報のみ」を教える教員が、その教科担任として当たるべきだが、2006年度開始早々には3割程度に過ぎず、数学と理科の教員が最も多く担当している。このことは2003年からの必修化に向けて2000年から2002年の夏休みに開催された現職教員向け講習会で情報科免許を取得させて、それまでコンピュータ分野も扱っていた家庭科のほか、理科や数学などの教員が、研修を受けて教科「情報」の教員免許を取ってから、急

遠情報科教員を養成した経緯がある。

しかし調査によると、今年で7年目を迎えるにもかかわらず、教科「情報」の担当教員のうち78.3%が他教科の担任を兼ねており、「情報」の指導のみに専念できない状況にあり、更に普通科高校の約4校に1校では、教科「情報」の担当教員が一人しかない現状にある。そこで調査した結果を表5に示す。

(%)	情報のみ	数学も	理科も	外国語も	社会も	国語も	家庭科も	その他	合計
2006年度	31.1	29.1	22.3	1.9	6.8	3.9	3.9	1.0	100
2007年度	53.3	29.7	9.7	0.4	2.3	1.2	0.8	2.7	100
2008年度	53.2	27.2	10.7	1.1	2.4	0.9	3.3	1.1	100
2009年度	57.9	24.7	8.1	1.3	1.8	1.8	3.4	1.1	100

## 5. 考察

2005年度から2009年度までの新入生に対して、どのような基礎的情報能力（情報リテラシ）を有するのかのアンケート調査を行った。高等学校で普通教科「情報」を履修した2006年度以降の入学生と以前の学生の違いを調査し報告した。今年度も、昨年に引き続き文化女子大学の新入生に対してもアンケート調査を行ったが、これまでと比べて傾向とレベルに大きな変化は認められなかった。ただ今年度は、調査した母数が増えたためにデータとしては信頼性は高まったと感じた。また、これまでと同様にこの教科の履修漏れが疑われる現役生も、未だに若干ながら存在した。この履修漏れが社会問題化したのを受けて該当する各高等学校では改善に取り組んでいたはずではあるが、このような結果が出ている。しかしながら、担当教員の約6割が、校内のシステム管理やほかの教員のサポートなど「学校の情報化」に関する仕事もしており、忙しさに拍車をかけている報告もある。このため担当教員の多くは、「情報社会と情報に関わるモラル」「他教員の指導方法の共有」など情報教育を進めるに当たって必要な知識や技能を習得したいと考えているにもかかわらず、実際に研修会などに参加できているのは42.2%で、それも年に1、2回程度というのが実情となっている。

このことから、入学生全員が情報教育の内容をすでに学習済であると想定するには、まだ現時点では無理があることがわかる。せっかく小学校から高

等学校までの教育体系が整っているにもかかわらず、「情報」教育によって情報の基本的スキル（コンピュータリテラシの部分も含め）が確実に向上しているとはいえない。

一方で、ここに来てこの教科「情報」は、ゆとり教育から学力重視の教育へと方向性を変えていることもあり学習指導要領の見直しに伴い、2008年12月末に高等学校の学習指導要領（案）が公開され、必修選択とされ科目名は「情報の科学」「社会と情報」という2科目にまとめられた。すなわち「教育の情報化」の3本柱、(1)情報教育の推進(2)教科の指導におけるICT活用(3)校務の情報化の3つの目的を明確に区別して、今後の方向性や学習指導要領との関連を明確にしようとしている。特に新しい学習指導要領では情報教育の推進は教科の学力向上と有機的に関連している。また機器の操作についてもキーボード操作やファイル操作などのリテラシ教育にも基本を身に付けさせようとしている。これらの調査を通じて、大学教育における情報教育のあり方を考える上で重要なデータが得られた。今後も継続して調査を行うことにより、さらに詳細な調査データを蓄積・発表していくことを検討している。

## 謝辞

本調査実施にあたって多くの協力をいただいた両大学の情報科目担当の関係者の皆様に心より感謝の意を表します。

## 参考文献

- 1) 「高等学校普通教科「情報」の実施状況」(平成18年度情報教育研究集会講演論文集付録資料、2006)
- 2) 「高等学校普通教科「情報」の実施状況」(平成19年度情報教育研究集会講演論文集付録資料、2007)。
- 3) 「高等学校普通教科「情報」の履修等状況調査」東京大学情報基盤センター 情報メディア教育部門  
<http://www.edu.c.u-tokyo.ac.jp/edu/information.html>
- 4) 「高等学校における教科「情報」について」(経済産業省 商務情報政策局 平成21年5月1日)

<http://www.ipa.go.jp/jinzai/sangaku/pdf/07/siryo5.pdf>

- 5) 「平成20年通信利用動向調査（世帯編）の概要」（総務省）

[http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/pdf/HR200800\\_001.pdf](http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/pdf/HR200800_001.pdf)

- 6) 文部科学省、“高等学校学習指導要領解説 情報編”（開隆堂出版株式会社、2000）
- 7) 篠政行「情報教育としてのコンピュータリテラシとタッチタイピング」（駒沢女子短期大学紀要、第39号、2006）
- 8) 篠政行「コンピュータリテラシに関する2006年度入学生のアンケート結果」（駒沢女子短期大学紀要、第40号、2007）
- 9) 篠政行「コンピュータリテラシ教育に関する入学生のスキル調査」（駒沢女子短期大学紀要、第41号、2008）
- 10) 篠政行「普通教科「情報」の履修と情報リテラシに関する平成20年度入学生のアンケート調査結果について」（駒沢女子短期大学紀要、第42号、2009）